

<原著>

攻撃的ツイートに対する拡散行動促進要因に関する 探索的研究

横澤侑奈 信州大学大学院総合人文社会科学研究科
篠田直子 信州大学学術研究院教育学系

概要

近年深刻な社会問題となっている SNS 上で行われる他者への攻撃とその拡散は、わずかな確信をもった投稿者と多くの追随者によって引き起こされると考えられている。本研究では Twitter を題材として、攻撃的ツイートに対する拡散行動促進要因を、攻撃性の高低×数情報の有無の 4 つの攻撃的ツイート場面を提示し探索的に検討した。その結果、主体的に拡散行動を行う者はごくわずかであること、攻撃性の低いツイートや数情報が提示されたときに拡散行動を行う者がわずかに観察された。拡散行動促進要因としては、個人の反応的攻撃性の高さや道徳的規範意識の弱さが確認できた。

キーワード：誹謗中傷，拡散行動，追随者，反応的攻撃性，道徳的規範意識

問題と目的

インターネット上の誹謗中傷

近年、インターネット上において匿名のまま不特定多数に向けて特定個人の誹謗中傷を書き込んだり、特定個人のアカウントに対して一方的に誹謗中傷のメッセージを発信したりする事例が発生しており、インターネット上の誹謗中傷が深刻な社会問題になっている（総務省プラットフォームサービスに関する研究会，2020）。「ある人物や企業が発信した内容や行った行為について、ソーシャルメディアに批判的なコメントが殺到する現象」である炎上は毎年 200 件程度発生しているが（山口，2015），誹謗中傷メッセージの炎上により自死に追い込まれたり、生活を失ったりするなどの話題はしばしばメディアでも大きく取り上げられており、その対応は喫緊の問題である。

炎上の主体となる、実際に炎上の書き込みに直接参加する人はインターネット利用者のうちごく限られた一部に過ぎず（総務省，2019），主体的に投稿する人以外の“安易に再投稿・拡散する人”の増加により多くの悪口が集まり集団攻撃となることで、人を傷つけることになることが示されている（総務省『インターネットトラブル事例集』有識者会議（2021），インターネットトラブル事例集（2021 年版））。小山他（2019）は、2018 年

12月19日から2019年1月22日に発生した6つの炎上に関してユーザーの炎上参加について分析した結果、アクティブユーザーの約0.3%のみが1回以上のツイートを行っているにすぎず、多くのフォロワー数を持つごく少数の高頻度炎上関与ユーザー間での反応のやりとりによって炎上が広がるという共振構造を指摘している。ある高頻度炎上関与クラスター内の一部で取り上げられた炎上案件は、速やかにクラスター内で共有された後、クラスター内各ユーザーのフォロワーを通じて、広くTwitter全般に拡散されていくのがネット炎上のメカニズムと推測している。つまり、集団攻撃である炎上は主導する一部のユーザーとそれに追従する多くのフォロワーが組み合わさることによって炎上が発生すると考えられる。逆説的にいえば、多くのフォロワーがあつてこそその炎上と言える。

炎上の発生を誘引しているフォロワー行動は再投稿だけではない。Twitterの利用状況を調査した叶(2019)では、投稿頻度がほぼ毎日の対象者が33.9%に対し、「いいね」や返信の頻度は54.2%であったことから、投稿するよりも他者の投稿を拡散する人が多いことが示唆されている。以上から、誹謗中傷等攻撃的ツイートにおける拡散行動の影響は大きいと考えられるが、拡散行動に焦点をあてた研究は多くはない。攻撃的ツイートを炎上させる可能性のある拡散行動の特徴について把握し、インターネット上の誹謗中傷予防に関する示唆を得ることは重要である。では、攻撃的ツイートの拡散はなぜ起こるのだろうか。

攻撃性のモデル

拡散は攻撃対象への間接的攻撃といえる。攻撃性については心理学だけではなく社会学・人類学・動物学・精神医学等々多くの立場から研究されており、理論仮説もさまざまに統一した見解は得られていないが、近年総合し攻撃性のメカニズムを全体として理解しようとモデルとして集約されつつある(大淵, 2011)。二過程モデルと一般的攻撃モデルの2つが代表的なモデルであるが、いずれも攻撃性を喚起させる嫌悪状況をどのように認知し、生じた攻撃性動機づけをどのように評価し制御するかによって、行動の種類(衝動的・熟慮的)が異なるという考え方である。衝動的行動は不快な感情に裏打ちされた攻撃スキーマ(スクリプト)によって起きやすく体験が積みあがることで自動化されやすい。一方、熟慮的行動は先行刺激に対し悪意の帰属や道徳的判断など認知や判断、さらに危害行動に意図性を付与することによって、攻撃対象としての確からしさを付与することによって起きる。この2つの行動はお互いに影響し合いながら他者を攻撃するので、攻撃行動は嫌悪状況自体そのものではなく、それをどのような感情でどう認知し、どう判断するかが行動に影響する。

個人の状況要因

濱口(2017)は、大学生の能動的・反応的攻撃性に関して質問紙調査を行い、人を傷つけること自体を目標とする「反応的攻撃」は先行する欲求不満事態や嫌悪事態によって生じた怒りによって駆動されると指摘している。どれくらい強い攻撃動機づけが形成され

るかは、個人が環境と他者について形成する知覚、また、行為の結果に関する予期と期待、人がある状況において一般にどのように反応するかに関する知識と信念、特定の反応能力を自分がどれくらい持っていると感じているかなどの認知に依存する（大淵，2011）。不快情動（怒り，不満，悲しみ）が他者を攻撃したいという願望（攻撃動因）を生み出すが、自己制御機能が十分に働いているときは、不適切な攻撃反応を抑えることが可能である一方で、自己制御が十分に働かないために攻撃行動が遂行される。抑制的な状況判断が働いているにも関わらず行動を遂行してしまうのは、先行する「欲求不満」によって生じた不快情動が強いためであり、この攻撃行動の矛先は欲求不満を与えた相手だけではなく、対象や形態を変えて表現される。このことから、個人の欲求充足度の状態が攻撃行動に何らかの影響を与えていることが推測できる。

集団力動の要因

攻撃的ツイートの拡散の主体がフォロワーにあると仮定すると、投稿者を中心とした集団の影響を受けていることは明らかである。自分がフォローしている投稿者の発言だから拡散するという状況も多い。このような状態では「リツイート」や「いいね」は攻撃的投稿に対するひとつの同調行動ととらえられる。大西（2008）では自我同一性形成において、「個」を否定した「関係」への志向性を「同調的対人態度」とし、他者との関係を気にするあまり、「個」としての自己を主張することができず、本当の自分を押し殺してひたすら周囲にあわせるという傾向と定義しているが、フォローしている集団への帰属を強いものにするために同調して拡散することも十分考えられる。

インターネット上の行動を統制する要因

攻撃性には道徳的判断が関連していると考えられるが、インターネット上の「情報モラル」も重要な要因である。玉田他（2004）ではインターネットの普及に伴い、情報化に対応した教育を推進する上で、「情報モラル」教育が必要であると言われ続けてきている状況に言及し、道徳的規範知識・情報技術の知識・合理的判断の知識の「3種の知識」による情報モラル指導に必要な道徳的規範尺度を作成している。この尺度では匿名性についても含まれている。Zimbardo は、人は「匿名性」が保証されている状態におかれると、自己規制意識が低下し「没個性化」が生じることを示している（山口，1980）。自己規制が弱くなることで安易な行動を選択しやすくなる可能性がある。また、多くの中の一ひりであれば影響力は少ないだろう、ほかの人も反応しているのだから自分も反応してもよいだろうといった「リスクシフト」が起きている可能性もあるため、投稿への反応数の情報は重要だと考えられる。さらに、山本他（2019）は、「ウェブアクセスリテラシー」の重要性を指摘している。熟慮的行動とは、必要な情報を収集し判断した上で攻撃するかどうかを決定するが、「ウェブアクセスリテラシー」とは、ユーザーが正確なウェブ情報を取得し、効果的な意思決定を行えるような情報アクセス環境や仕組み作りの重要性に着目し、検索エンジン等の情報アクセスシステムを上手く使いながら、情報を批判的に

精査し、正確なウェブ情報を収集するための能力のことを指す。ここでの批判的であるとは、より良い意思決定や問題解決を行うために、証拠に基づいて理論的に考えたり、自分の考えが正しいかどうかを立ち止まって考えようとする状態と定めているが、これらの情報モラルやウェブアクセスリテラシーを有することの必要性は、現代の情報化された社会においてより感じられ、これはインターネット上における攻撃場面にも通ずるものがあると考えられる。

以上、攻撃的ツイートへの拡散行動には、個人の攻撃性に関する要因、集団力動に関する要因、インターネット上の社会的行動に関する要因など様々な要因が推察される。よって本研究では、大学生・大学院生における攻撃的なツイートへの反応・拡散行動とその促進要因について、研究Ⅰにおいて拡散行動の実態および促進要因を収集し整理後、研究Ⅱにおいて質問紙調査を行い、拡散行動と促進要因との関係を検討することで、拡散の抑制要因を考察することを目的とした。

Twitter の特徴

本研究では、攻撃的なツイートをとり上げた。北村他（2016）では、Twitter は他の SNS と比較した場合に、既知の友人が少なく個人情報の開示度が低い「弱いつながりの SNS」ととらえられる。「弱いつながりの SNS」はネット上の対人関係と結びついており、Facebook や mixi といった既知の友人が多く個人情報の開示度が高い「強いつながりの SNS」と同等以上のオンラインでの友人間の交流が Twitter ではなされていると示されている。このことから、Twitter はオンライン上での交流がメインであり、個人情報の開示度が低い場合でも交流することができると言える。また個人やグループで既知の友人とのやりとりをメインに行う LINE に次いで利用者率が高いことも示されており、既知の友人との交流の場としても Twitter が利用されていると考えられる。さらに LINE とは異なり既知の友人以外との交流のために Twitter が利用されている可能性がある。Twitter は既知かどうかに関わらず多くの人と繋がることのできる SNS であり、インターネット上での様々なやりとりや出来事に触れる機会が多いものであると考えたため、本研究では Twitter を題材として扱うこととする。

研究Ⅰ（予備調査）

目的

SNS における反応行動の実態を確認し、本調査で焦点をあてる反応促進要因・反応抑制要因をピックアップすること、本調査で提示する投稿内容を決定するために、大学生・大学院生が興味をもち反応しやすい投稿の条件を具体的にすることを目的とした。

方法

対象者と手続き A大学の大学院生 9名（男性 1名、女性 8名、 $M=24$ 歳）を対象に、2021 年 2 月から 3 月に、一人 30 分～1 時間半の半構造化面接を実施した。「SNS の利用

状況」についてのインタビュー調査であることを説明し、同意の得られた対象者についてプライバシーの保護可能な場所にて1対1の面接を実施した。

質問項目 SNS 使用実態 (SNS 使用経験, 使用 SNS の使用頻度・目的・使用目的), 反応促進要因, 反応抑制要因, 拡散・炎上の要因, 反応しやすい投稿の特徴

結果と考察

SNS 反応行動の実態 現 Twitter 利用者は9名中8名であり, 使用頻度は毎日から2・3日に1回と高かった。ネガティブな投稿としてとらえられているのは, 愚痴や辛い状況を吐露している投稿であり, 攻撃的ツイートは上げられなかった。応援したいという気持ちから反応しようと思うが, 内容がセンシティブなものであったり, 深刻であったりすると反応を躊躇する状況が語られた。反応抑制理由は, 自分の意見を違う意味で捉えられることを懸念するといった自分の本意を正確に伝えられる手段がないこと, 「それ(反応)を見た他の人が傷つく」といった道徳性, 「“いいね” がそんなについていない」等, 他人の判断や行動の影響が語られた。

拡散・炎上の要因 対象者は全員過去に拡散・炎上には関わった経験がなかったため, 一般論として拡散・炎上の要因と考えられるものを挙げてもらった結果, 「誰が言ったか分からない・顔が見えない」など匿名性, 「みんながやっているから大丈夫」といったリスクシフト, 「皆と同じ行動をしているだけ」といった同調行動, 「悪いと思っていない・どうなるか考えていない」といった道徳的規範意識の欠如, 「間違いを正したい」といった正義感, 「どこにもぶつけられないものをぶつける・人を評価する優越感」といった反応する人のストレス発散の場, 「荒らし¹⁾」の存在などがあげられた。また, SNS ではボタンひとつで深く考えずに操作できるといった, インターネット上の行動における特有の敷居の低さも拡散しやすくなる要因のひとつとして指摘された。

大学生・大学院生が興味をもち反応しやすい投稿の条件 拡散が起きやすいのは, 身近で起こった多くの人に認識されている話題, 人によって受け取り方が異なる内容の投稿で, 自分がどのような発言をしても受け入れられる可能性が高い場合, 自分の発言を代替する投稿や好奇心を刺激される投稿等自分の考えや関心に合っている状況等があげられた。

研究Ⅰから, 研究Ⅱで使用する攻撃的ツイートとして, 調査時期直前に話題としてメディアで取り上げられていた「操作ミスによる他人を巻き込んだ死亡事故」を取り上げ, 反応促進要因として, 欲求充足の欠如, 反応的攻撃性の強さ, 同調的反応行動, 道徳的規範意識(匿名性を含む), ウェブアクセスリテラシーの影響を検討することとした。

¹⁾ 「荒らし」とは, 不特定多数の人間が参加する形態のコンピュータネットワーク上のリソースに対して, 不合理なメッセージの送信や妨害行為などを継続的に行う行為または当該行為を行う者

研究Ⅱ(本調査)

目的

攻撃的ツイートに対する反応行動を確認し、反応促進要因について検討することを目的とした。

方法

対象者 A大学の人文学部・教育学部の学部生および文系の大学院生 136名(男性 50名, 女性 83名, 回答しない3名, 18~24歳)を対象とした。

手続き 2021年10月25日~11月11日にGoogleフォームにて作成した質問紙のURLを、縁故と授業での依頼によってアクセス先を提供し回答を求めた。場面提示の順序によって2つの条件に分けたため、対面場面ではアクセス先を記載した用紙をランダムで配布した(配布型)。オンライン場面では学籍番号の数字下一桁で分けて提示した(提示型)。調査は匿名で行い、個人が特定されないように配慮して実施した。

倫理事項 調査への参加は任意であり、調査のはじめに確認事項を提示し了承が得られた場合のみ実施した。また本調査は、信州大学教育学部研究委員会倫理審査部会の承認を得ている(管理番号21-15)。

質問項目

A) 攻撃的なツイートに対する反応とその理由

「操作ミスによる他人を巻き込んだ死亡事故」について攻撃性の高低×数情報の有無の4場面を設定し、それぞれの場面における反応とその理由について、質問紙法により回答を求めた。数情報ははじめに無し、次に有りとし、攻撃性の高低についてはカウンターバランスをとった。攻撃性の高い場面としては、運転ミスではなく運転者の人格を否定しているニュアンスをもち、投稿者のネガティブな感情が明らかに感じられるよう設定した(図1)。場面の設定は、心理学を専門とする大学院生1名と教員1名で検討した。

B) 拡散行動促進要因

① 反応的攻撃性

濱口(2017)の作成した能動的・反応的攻撃性尺度の大学生版から、易怒性(4項目)、怒り(4項目)、報復意図(4項目)を抜粋して使用した。

③ 道徳的規範意識

玉田他(2004)が小・中学校学習指導要領をもとに作成した道徳的規範意識(下位尺度「思慮」「節度」「思いやり・礼儀」「正義・規範」)から、大学生のSNSによる対人関係とかかわりの深い11項目抜粋し、さらに4項目追加した。匿名性も含まれる。

④ ウェブアクセスリテラシー

山本他(2019)が作成した「ウェブアクセスリテラシー尺度(69項目5件法)より、内容特性に関連したウェブ情報の信憑性検証戦略(7項目)、ウェブ情報の信憑性判断時に生じる認知バイアスへの耐性(4項目)、客観性(2項目)を抜粋して使用した。

	攻撃性高	攻撃性低
数 情 報 な し		
	反応行動選択 (S A)	反応行動選択 (S A)
	↓ 1 時間経過を想定	↓ 1 時間経過を想定
数 情 報 あ り		
	反応行動選択 (S A)	反応行動選択 (S A)
	数提示に関する質問	数提示に関する質問

図1 攻撃的ツイート内容と質問提示順

⑤ 同調的対人態度

大西 (2008) の作成した同調的対人態度尺度をそのまま使用した。

⑥ 欲求充足度

吉光 (2012) の作成した欲求階層の満足度尺度をそのまま使用した。本尺度は Maslow (1968) の欲求の 5 段階説をもとに作成され、日本、中国、韓国の大学生を中心とした若者を対象に妥当性・信頼性が検討されている。

C) ツイート行動 (質問紙)

Twitter における使用経験、1 日の利用時間・閲覧頻度・投稿頻度・反応頻度、閲覧内容・投稿内容 (叶, 2019) への回答を求めた。

D) デモグラフィック

年齢、性別、学年の回答を求めた。

尺度の妥当性・信頼性の検討

既存の尺度の修正を加えた尺度に関して、妥当性・信頼性の検討を行った。

道徳的規範尺度 因子分析 (最尤法, プロマックス回転) の結果、4 因子が抽出され、2 項目が除外された。第 1 因子は、人が見ているかどうかにかかわらず決められたルール

はきちんと守ることができるという項目で「規範」と命名した。第2因子は、日頃から相手に対して「思いやり」の気持ちを持って接しているかどうかで「思いやり」と命名した。第3因子は、悪いことは悪いと注意できるかどうかで「正義」と命名した。第4因子は、正しく情報を吟味する態度を身に付けているかどうかで「思慮」と命名した。また、除外した2項目（「実名だと行動を躊躇することがある」「匿名だとやってはいけないと思っていることでもやってしまうことがある」）は、匿名性に関する項目として単独に扱うこととした。

ウェブアクセスリテラシー尺度 因子分析（最尤法・プロマックス回転）の結果、因子負荷量の小さい1項目を除いたところ、2因子が抽出された。先行研究（山本他, 2019）を参考に、第1因子は情報の信憑性を検証する行動を行うかどうかで「信憑性検証戦略」因子と命名した。第2因子は他者の提供している情報を信用するかどうかで「他者信憑性」因子と命名した。

表1は、本研究で検討する攻撃的ツイートへの反応促進要因の下位尺度一覧である。いずれの尺度も一定の妥当性が確認された。信頼性に関しては、生活安心が.64、思慮が.63と低かったが、その他の下位尺度は一定程度の内的整合性が示された。

表1 下位尺度の項目数・平均・SD・α係数

		項目数	範囲	M	SD	α
欲求	自己実現	5	1~5	3.24	0.75	0.73
充足度	生活安心	4	1~5	3.58	0.82	0.64
	正義	3	1~5	3.85	0.96	0.81
規範	思いやり	3	1~5	3.22	0.96	0.79
意識	節度	3	1~5	3.92	0.87	0.76
	思慮	3	1~5	3.49	0.80	0.63
同調	同調的対人態度	5	1~5	3.28	1.47	0.90
反動的 攻撃	報復意図	4	1~5	2.68	1.06	0.88
	易怒性	4	1~5	2.25	1.00	0.87
	怒り持続	4	1~5	2.47	0.95	0.79
ウェブ リテラシー	信憑性検証戦略	8	1~5	3.50	0.71	0.82
	他者信憑性	4	1~5	2.26	0.79	0.81
匿名性	実名だと行動躊躇	1	1~5	3.53	1.35	
	匿名だと制御不能	1	1~5	1.60	0.86	

注) 回答肢は、1. 全くあてはまらない、2. ややあてはまらない、3. どちらともいえない、4. ややあてはまる、5. あてはまる

下位尺度得点間相関

下位尺度得点間の相関を表2に示す。自己実現と生活安心($r=.53$)、規範と正義($r=.44$)、思慮と信憑性検証戦略 ($r=.36$)、報復意図と易怒性($r=.41$)、報復意図と怒り持続($r=.46$)、易怒性と怒り持続($r=.55$)、同調と他者信憑性($r=.40$)に弱いから中程度の正の相関、自己

実現と同調 ($r=-.37$), 自己実現と易怒性 ($r=-.32$), 生活安心と易怒性 ($r=-.35$), 同調と正義 ($r=-.32$), 思いやりと報復意図 ($r=-.34$), 思慮と他者信憑性 ($r=-.38$), 信憑性検証戦略と他者信憑性 ($r=-.36$) の間に弱い負の相関がみられた。以上より, 欲求充足度が低いと怒りやすい(易怒性が高い)が, 易怒性が高いからといって怒りが持続するわけではないことから, 易怒性の高さは衝動的な怒りが影響している可能性が推察された。また, 信憑性検証戦略と思慮に正の相関がみられたことから, 他者信憑性と同調的対人態度に正, 信憑性検証戦略と他者信憑性に負の相関がみられたことから, 熟慮する際には情報を検証するが, 同調性が高いと情報を十分に検証していない可能性が推察された。

表2 下位尺度間における Pearson の積率相関係数

	生活安心	規範	思いやり	正義	思慮	同調	報復意図	易怒性	怒り持続	信憑性 検証戦略	他者 信憑性
欲求 充足度	自己実現 0.53 **	0.08	0.24 **	0.04	0.07	-0.37 **	-0.07	-0.32 **	-0.29 **	0.10	0.02
	生活安心	0.22 *	0.22 *	-0.05	-0.07	-0.13	-0.01	-0.35 **	-0.27 **	-0.12	0.18 *
規範			0.36 **	0.44 **	0.00	-0.06	-0.14	-0.26 **	-0.07	0.15	0.02
道徳的 規範 意識	思いやり			0.30 **	0.15	-0.22 *	-0.34 **	-0.45 **	-0.20 *	0.26 **	-0.02
	正義				0.14	-0.32 **	-0.19 *	-0.13	-0.04	0.23 **	-0.19 *
	思慮					-0.14	-0.01	-0.17 *	-0.06	0.36 **	-0.38 **
同調	同調的対人態度						0.09	0.22 **	0.06	-0.30 **	0.40 **
反動的 攻撃性	報復意図							0.41 **	0.46 **	-0.17 *	0.19 *
	易怒性								0.55 **	-0.28 **	0.13
	怒り持続									-0.20 *	0.21 *
ウェブ アクセス リテラシー	信憑性検証戦略										-0.36 **
	他者信憑性										

* $p < .05$, ** $p < .01$

結果と考察

Twitter 使用実態 Twitter を使用したことがある者は 119 名 (87.5%) と 9 割近くに使用経験が見られ, そのうち 95 名 (69.9%) が現在も使用していた。利用時間は約半数が 1 時間未満であったが, 一方で一日に 3 時間以上利用しているヘビーユーザーも 15 名 (11.0%) 見られた。7 割が週に数回から毎日閲覧していたが, 自分が行動を起こすという意味での他者の投稿への反応は 5 割, 自分で投稿している者は 4 割程度であった。閲覧内容の 8 割は興味趣味であり, その 3 割が投稿も行っていった。

攻撃的ツイートに対する反応とその理由 表 3 は刺激場面に対する反応内容をまとめたものである。投稿内容の攻撃性の高さや数情報の有無に関わらず「何もしない」という回答をした人が 9 割前後で, ほとんどの人が反応しなかった。本研究では, 投稿に対して何らかの行動を起こすかという点に着目したため, 「リプライ欄を見る」や「スクリーンショットを残す」などの反応は何もしないに含まれる。反応しない理由はいずれの場面でも「反応するべきではないと思った」が最も多く, 自己選択として反応しないことを選択していた。

表3 攻撃的ツイートに対する反応内容

		攻撃性高				攻撃性低			
		数情報なし		数情報あり		数情報なし		数情報あり	
		N	%	N	%	N	%	N	%
無 反応	なにもしない	132	97.1	126	92.6	125	91.9	120	88.2
	リツイート	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	0.7
拡散 行動	引用リツイート	1	0.7	4	2.9	1	0.7	2	1.5
	リプライ	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	いいね	2	1.5	3	2.2	10	7.4	13	9.6
積極 反応	スパム報告	1	0.7	2	1.5	0	0.0	0	0.0
	炎上させる	0	0.0	1	0.7	0	0.0	0	0.0

4 場面のいずれかで反応した者を反応者 ($N=22$)、いずれの場面でも何もしないと回答したものを無反応者 ($N=114$) の 2 群に分け、反応理由を攻撃性の高低および数情報の有無で比較したものが表 4 である。攻撃性の高い投稿では、「内容を否定・訂正したい」「反応すべきではないと思った」が高く、無反応者でも内容を訂正したい思いはあるが、スパムブロックや自分の戒めにするなど投稿者への直接的な反応はしないという自己制御が効いている可能性が唆された。一方、攻撃性の低い投稿では、「反応に同意できる」「内容は正しいと思う」「特に関心のない内容だった」「なんとなく」が高く、内容に同意できる場合には反応している様子がうかがえた。また、数情報が付加された投稿では「他の人が反応しているので自分が反応する必要がないと思った」「なんとなく」が高くなる傾向がみられたが、大きな差は見られなかった。

反応促進要因の特徴 尺度得点をみると、「自己実現 ($M=3.24$, $SD=0.75$)」「生活安心 ($M=3.58$, $SD=0.82$)」など欲求充足度、「正義 ($M=3.93$, $SD=0.84$)」「規範 ($M=3.86$, $SD=0.97$)」「思慮 ($M=3.49$, $SD=0.32$)」「思いやり ($M=3.22$, $SD=0.96$)」など道徳的規範意識、「同調的対人態度 ($M=3.29$, $SD=0.95$)」, 「信憑性検証戦略 ($M=3.51$, $SD=0.71$)」, 「実名だと行動を躊躇する ($M=3.53$, $SD=1.34$)」の尺度得点が高く、「報復意図 ($M=2.67$, $SD=1.06$)」「易怒性 ($M=2.25$, $SD=0.99$)」「怒り持続 ($M=2.47$, $SD=0.95$)」等反応的攻撃性や「他者信憑性 ($M=2.25$, $SD=0.79$)」, 「匿名だとやっつけてはいけないこともやっってしまう ($M=1.60$, $SD=0.86$)」の得点が低いことが示された。このことから、本研究の対象者は、欲求充足度、道徳的規範意識が高く、情報に関しては自分でその信憑性を確認するといった規範意識やインターネット上のモラルに対する一定の知識があることから反応する人が少なかったと考えられる。また、そもそも SNS 上の攻撃に対して関わらない、または無関心であるため反応しない可能性も考えられた。

表4 各ツイート場面における反応理由

	攻撃性高			攻撃性低			数情報無			数情報有		
	反応者	無反応者	計	反応者	無反応者	計	反応者	無反応者	計	反応者	無反応者	計
反応に同意できる	3	0	3	26	4	30	12	3	15	17	1	18
内容を否定・訂正したい	13	28	41	4	21	25	8	26	34	9	23	32
内容は正しいと思う	2	4	6	10	11	21	6	8	14	6	7	13
興味・関心があった	2	2	4	6	3	9	3	2	5	5	3	8
特に関心のない内容だった	7	50	57	4	66	70	6	59	65	5	57	62
反応すべきではないと思った	26	188	214	9	164	173	20	178	198	15	174	189
他の人が反応しているので自分が反応する必要がないと思った	3	17	20	1	21	22	1	13	14	3	25	28
フォローにどう思われるか気になった	2	17	19	2	17	19	4	19	23	0	15	15
投稿者にどう思われるか気になった	1	3	4	1	1	2	1	1	2	1	3	4
なんとなく	3	18	21	4	35	39	3	20	23	4	33	37

注) 複数回答(N=136)

反応の有無と反応促進要因との関係 反応促進要因について反応者と無反応者における差について t 検定を行った結果、「同調的対人態度」と「実名だと行動を躊躇する」のみに差が見られた。「同調的対人態度」は反応者 ($M=3.00$, $SD=1.01$), 無反応者 ($M=3.35$, $SD=0.98$) と反応者の方が低い傾向がみられた ($t(134) = 1.60$, $p=.056$)。一方、「実名だと行動を躊躇する」は反応者 ($M=4.00$, $SD=0.85$), 無反応者 ($M=3.43$, $SD=1.41$) と反応者の方が高い傾向がみられた ($t(134) = -1.86$, $p=.032$)。

匿名性に関する項目については、「匿名だとやってはいけないこともやってしまうことがある」についても反応者 ($M=1.74$, $SD=0.84$), 無反応者 ($M=1.57$, $SD=0.92$) と有意差はないものの反応者の方が高く、反応者は匿名性に左右される傾向が強い可能性があることが示唆された。同調的対人行動については、予想に反して無反応者の方が多かったが、今回のような反応しない人が大多数の集団の中では、反応しないという行動に同調しているとも考えられる。反応的攻撃性についても有意差はないものの反応者は「報復意図 (反応者: $M=2.87$, $SD=1.27$, 無反応者: $M=2.67$, $SD=1.23$)」や「怒り持続 (反応者: $M=2.67$, $SD=1.23$, 無反応者: $M=2.43$, $SD=0.68$)」でわずかに高い傾向がみられた。以上より、反応者は他人への同調的態度を示さず、反応的攻撃性が高く、匿名性によって自己制御が効かなくなりやすい傾向が見られたが個人差が大きかった。

パターン別反応促進要因の特徴 個人差が大きい傾向がみられたので、4つの攻撃的ツ

イートのうち反応する攻撃的ツイートによって分類したところ、9パターンが得られた(表5)。いずれも全く反応しない無反応であったパターン0, 攻撃性の高さの影響がみられたのがパターンA・B・C・D・F・G, 数情報の有無の影響がみられたのがパターンA・B・D・E・F・G, どちらの影響も受けていないのがパターンHであった。この中で、攻撃性のみを受けているパターンCと数情報の影響のみを受けているパターンE, 攻撃性や数情報に関係なくすべてに反応するパターンHをとりあげ、反応促進要因について全体と比較した(図2)。

表5 攻撃的ツイート場面によるパターン分類

	攻撃性高 数情報無	攻撃性高 数情報有	攻撃性低 数情報無	攻撃性有 数情報有	N
パターン0					114
パターンA				反応あり	5
パターンB			反応あり		2
パターンC			反応あり	反応あり	6
パターンD		反応あり			2
パターンE		反応あり		反応あり	2
パターンF		反応あり	反応あり	反応あり	2
パターンG	反応あり				2
パターンH	反応あり	反応あり	反応あり	反応あり	1

パターンCはツイート内容の攻撃性の高さからのみ影響を受けているパターンで、6名が分類された。欲求充足度は全体と変わらないが、同調的態度・他者信憑性が低く、道徳的規範意識はやや高めである。易怒性は低いが怒りが持続しやすい。つまり衝動的に反応するわけではなく、他人ではなく自分の判断で反応するか決断するタイプと言える。

パターンEは数情報からのみ影響を受けているパターンで、2名が分類された。欲求充足度は高め、同調的態度・他者信憑性が低く、道徳的規範意識は高め、特に正義が高い。易怒性・怒り持続は低いが報復意図が高く、信憑性検証戦略も高い。つまり自分の道徳性で判断し、情報を吟味するタイプと言える。数情報は判断の材料として使われると考えられた。

パターンHはツイート内容の攻撃性の高さや数情報には影響されず常に反応するパターンで、1名が分類された。欲求充足度は高く、規範・思いやりが低い。易怒性・報復意図が高いが怒りは持続しない、信憑性検証戦略が低く他者信憑性が高い。つまり、もともとの攻撃性が高くあまり情報を吟味せず他者の意見に左右されるタイプと言える。道徳性、特に他人を思いやる、社会のルールを遵守するという意識が薄いので衝動的に攻撃する可能性が高い。反応内容は、すべて“いいね”であった。

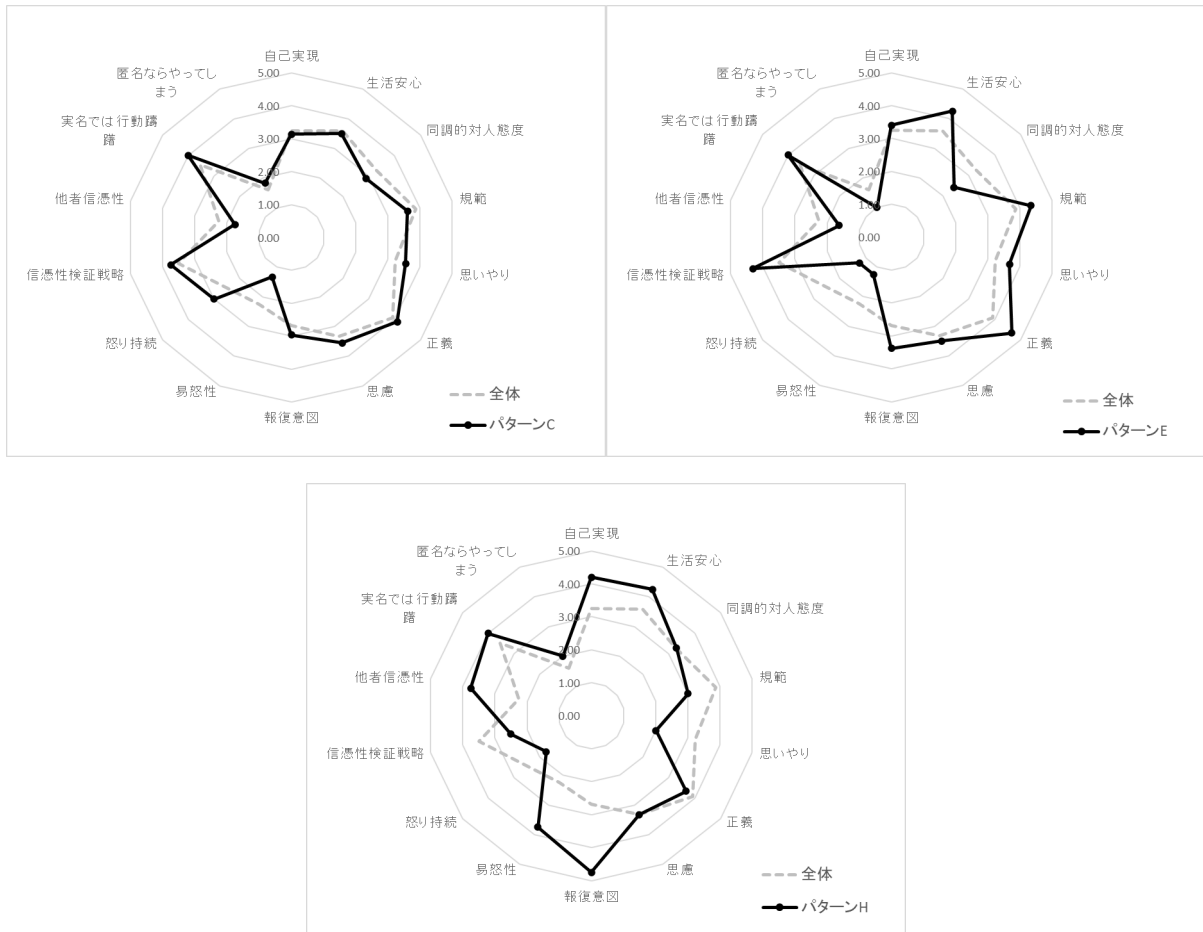


図2 パターン別反応促進要因得点

いずれの個別反応パターンからも、自分の基準よりも他人の動向に追随するようなタイプは見いだせなかったものの、反応的攻撃性の高低と規範意識の強弱が反応するか否かに影響を与えていた。

総合考察

攻撃的ツイートに対する反応とその抑制

攻撃的ツイートの拡散は、個人の反応的攻撃性の高さや相手のことを思いやる道徳的規範意識の弱さの影響を受けている可能性が示唆された。多くの人が反応しない集団の中で同調性が低いからこそ、自分の意思を貫いているのが今回の反応者の姿であり、想定していた追随型の反応者をとらえることはできなかった。本研究で拡散行動を行っている者は、他人の反応を判断材料の一つとして考えるタイプと他人の反応に左右されやすいタイプがあるなど、拡散行動促進要因は個人によりかなり異なる。共通して言えることは、判断基準として道徳性の影響が強く、正義感が強い場合には反応しやすいと言えることから、

道徳性教育は重要なポイントなるであろう。楠見（2013）は、リテラシー教育は従来は知識の欠如している対象者に専門家が一方的的に知識をあたえ、啓蒙によって知識を高めることでリスク回避を目指してきたが、近年は対象者の経験に基づく知識を想定した双方向的なコミュニケーションによって、情報を得たうえでの自己決定や社会的決定を目指しており、生活における経験と文脈、科学的証拠と価値観に基づいて、自立的、主体的に情報を集め、意思決定することにより、よき思考者（good thinker）として対処できるようになるためのリスクリテラシー育成の重要性を指摘している。インターネットに関する正しい知識や規範意識を持てるよう、気軽な反応が問題を増悪化させていることや正義に基づいた発言方法も含めたネットリテラシー教育の推進を進めることで、攻撃的な投稿に対する反応しやすさの低減を図ることは重要である。

本研究の対象者は熟慮型判断によって拡散するかどうかを意思決定していたが、ほんのわずかではあるがパターン H の 1 名のように、衝動的な攻撃性の制御ができず拡散行動を行っている場合も確認できた。衝動的な反応として手軽に反応できる“いいね”を選択していたことから、操作のしやすさを低減させることが反応抑制に効果があることが推察される。“いいね”ボタンを押す際に、押してもよいか確認するメッセージを提示することなどは無責任な拡散行動の抑制に繋がるものと考えられる。

さらに、熟慮した上で反応を決定しているタイプには、熟慮する材料を取り除くことは拡散行動を抑制する可能性がある。他者の反応数を可視化できないように仕様を変更したり、あいまいに可視化したり、例えば色などで多いか少ないかの情報を提供すること（川端他，2017）なども行動抑制のための工夫の一つになりえるだろう。個人要因としての攻撃性の自己制御については、すぐに獲得することは困難だが、獲得することで後に後悔するような無責任な行動を回避できる気づきを促すスキルトレーニングなども有効であると考えられる。個人要因としての攻撃性の自己制御を高め、判断の基準となる道徳的な規範意識を確立することが拡散行動を抑制するヒントとなるであろう。

本研究の限界と今後の展望

本研究では、攻撃的ツイートへの反応者数が著しく少なく量的な分析を行うことが困難であった。これは、対象者の問題と攻撃的ツイート提示法の問題が考えられる。本研究の対象者が国立大学の大学生・大学院生で、基本的な欲求が充足し、攻撃性が高くはなく、獲得している道徳性をもとに自己基準で判断して生活している者が多く、冷静に熟慮システムを駆動させ道徳的に判断する、安易に無責任に反応しない者が多かった可能性がある。また提示場面については、きっかけとなるツイートと反応の状態のみを提示したに過ぎなかった。誹謗中傷が炎上する要因として、ツイートに対する意見が分かれて議論になっている場合に追随しやすいという指摘もある（研究 I）。また、炎上のメカニズムから自分がフォローしている人の発言に対する反応から広がることが指摘されているが、今回の提示では攻撃的な投稿への直接的な反応しか意見を求められなかった。今後は、年齢や所属の

幅を広げた集団を対象にしたり対象者の人数を増加させたりすることで、量的な分析や詳細な心理的背景について検討を行うことが求められる。また、質問紙では設定しきれない場面への反応を確認するためには、実験で確認していく必要がある。

引用文献

- 濱口 佳和 (2017). 大学生の能動的・反動的攻撃性に関する研究—尺度構成と攻撃的行動傾向との関連の検討— 教育心理学研究, *65*, 248-264.
- 小山 耕平・浅谷 公威・榊 剛史・坂田 一郎 (2019). ネット炎上におけるユーザーの共振構造 第33回大会人工知能学会全国大会論文集 JSAI2019, 2E5J602-2E5J602.
- 大淵 憲一 (2011). セレクション社会心理学—9 新版 人を傷つける心—攻撃性の社会心理学— サイエンス社.
- 大西 将史 (2008). 同調的対人態度尺度の作成 日本教育心理学会総会発表論文集, *50*, 343.
- 川端 久美子・中田 悠理・木谷 庸二 (2017). SNSにおける「いいね」がユーザーに与える心理的影響とその表示方法に関する研究 日本デザイン学会研究発表大会概要集, *64*, 236.
- 北村 智・佐々木 裕一・河井 大介 (2016). Twitterの心理学—情報環境と利用者行動 誠信書房.
- 楠見 孝 (2013). 科学リテラシーとリスクリテラシー 日本リスク研究学会誌, *23*, 29-36.
- 総務省プラットフォームサービスに関する研究会 (2020). インターネット上の誹謗中傷への対応の在り方に関する緊急提言.
https://www.soumu.go.jp/main_content/000705948.pdf (最終閲覧: 2021年2月28日)
- 総務省『インターネットトラブル事例集』有識者会議 (2021). 青少年のインターネット利用におけるトラブル事例等に関する調査研究 2020年度総務省調査研究 総務省総合通信基盤局電気通信事業部消費者行政第一課.
https://www.soumu.go.jp/use_the_internet_wisely/trouble/ (最終閲覧: 2021年2月28日)
- 玉田 和恵・松田 稔樹・遠藤 信一 (2004). 3種の知識による情報モラル判断学習を実施するための道徳的規範尺度の作成とそれに基づく学習者の類型化 教育システム情報学会誌, *21*, 331-342.
- 叶 少瑜 (2019). 大学生のTwitter使用, 社会的比較と友人満足度との関係 社会情報学, *8*, 111-124.
- 山口 真一 (2015). 実証分析による炎上の実態と炎上加担者属性の検証 情報通信学会誌, *33*, 53-65.
- 山口 勸 (1980). 恐怖喚起と匿名性が攻撃行動に与える影響について 実験社会心理学, *20*,

1-8.

山本 祐輔・山本 岳洋・大島 裕朗・川上 浩司 (2019). ウェブアクセスリテラシー尺度の開発 情報処理学会論文誌 データベース, *12*, 24-37.

吉光 正絵 (2012). 東アジアの女子学生の音楽選好と欲求階層の関係 長崎県立大学国際情報学部研究紀要, *13*, 305-315.